OLYMPIC TORCH RELAY TOKYO 2020
Presenting Partner
NTT東日本

NTT東日本は、東京2020オリンピック聖火リレー
プレゼンティングパートナーです。

Hope Lights Our Way

希望の道を、つなごう。

多様性に満ちた豊かな佐渡を世界に発信したい

地元酒造メーカー 専務取締役 尾畑 留美子さん

本日、6月4日と5日の2日間、東京2020オリンピック聖火リレーが新潟県で行われる。糸魚川市をスタートし、ゴールの村上市まで、14の市町村を174人が聖火をつなぐ。1日目の第4区間、佐渡市を走る日本酒の蔵元、尾畑留美子さんに、オリンピックへの思いや聖火ランナーとして伝えたいことを聞いた。

自分とチームを信じる力。その大切さを実感した長野1998冬季大会

佐渡で生まれ育った尾畑留美子さんが、東京での生活を経て島に戻ったのは26年前のこと。希望と野望に満ちあふれていたが、しばらくは「から回りならぬ、から駆け足だった」と振り返る。ゆったりとした島時間とのギャップ、うまくいかないことの連続。「八方塞がり」と思うほど行き詰まっていた頃、長野1998冬季大会でのスキージャンプ男子団体の快挙に勇気をもらった。「特に原田選手の涙が印象的でした。どれだけ震える思いだったのか、それでも自分、チームを信じて飛んだのだろうと。あの姿を通して、絶対にあきらめてはいけないということ、チーム力や自分を信じる力の大切さを強く実感しました」

佐渡の廃校を酒蔵に。酒造りという日常を「おすそ分け」

「自分を信じる力」に背中を押されて、尾畑さんは「学校蔵」に踏み出した。廃校で仕込みを行いながら、国内だけでなく外国からも酒造り体験を受け入れ、佐渡を発信する特別授業も行っている。「酒造りという私たちにとっての日常、そのおすそ分けが、来訪者のおもてなしになれば」。きっかけは「日本一夕日がきれいな学校」と称された小学校が廃校になると聞いたからだった。東京出身で社長のご主人が「何とかして残したい。酒造りの場として再生できないか」と言い出した。当初は反対したという尾畑さん。「一つだけでも大変なのに、もう一つなんて考えられない。しかもゼロから酒蔵をつくるのは無謀」。そう返したところ「とにかく見に行こう」と言われた。渋々、急な坂道を上り、真野湾を見下ろす校庭の一角に立った途端、気持ちがガラリと変わった。「佐渡ってすごくきれいなんだと思いました。その時、海からの爽やかな風が体の中を抜けていって『これはやらねばならぬ』と口をついて出ていたんです」。生まれ育った佐渡。「出てってやる」と飛び出した10代。29歳で戻り、佐渡の魅力を再発見する日々だったが、「こんなにきれいだと思ったのは初めてだった」と言う。その景色を前に、尾畑さんの中には迷いがなくなり、熱い衝動とともに自分と周りの人たち、そして佐渡の可能性を信じる力が湧き上がった。とはいえ、予想どおり、酒蔵づくりは困難だらけで、構想から約6年を経てやっとスタートした。「無我夢中で、何があったのか覚えていないくらい。でも、信じる力がずっと原動力になって支えてくれたから、今がある」。学校蔵での酒造りは、今年で8年目を迎える。

聖火リレーと日本酒で豊かな佐渡を発信

学校蔵の酒は、オール佐渡産で造られている。コメ、水。そして、夏に行う仕込みのために、冬の環境をつくり出すエネルギーも、太陽の力だ。「日本酒は、地域の自然や物語を伝える"語り部"。同じように私も、聖火ランナーとして走ることで、佐渡の豊かな風土を伝えたい」

佐渡は「日本の縮図」と呼ばれている。南方、北方両系統の植物が自生する自然環境、険しい岩場やなだらかな砂浜など日本の海岸地形が揃う景観。豊かさの象徴でもある「多様性」に満ちた風景の中、尾畑さんは、自然と人が交わった史跡、佐渡金山周辺を走る。「佐渡という土地、その美しさを知ってもらうきっかけになればうれしい」

尾畑さんは、新型ウイルス感染症が落ち着いたら、ぜひ佐渡に足を運んで、佐渡の日本酒を味わって欲しいと話す。「世界をつなぐのが聖火リレーなら、人と人をつなぐのが日本酒。おいしい日本酒を間に、笑顔が生まれることを願っています」。幸せな日常への新たな一歩を胸に、尾畑さんは佐渡を走る。

インタビューは、2021年4月下旬に行われたものです。

ICT通信技術で、酒造りの可能性を開く

第二の蔵である学校蔵は、本蔵から車で15分。離れたところでのスタートが、ICTの通信技術を導入するきっかけになった。酒造りの場合、仕込みの間は、もろみや麹室の温度や湿度を測り、状況を把握することが不可欠だが、センシングと通信の技術によって、遠くにいても確認できる。「データは自動的に集積されていくので、酒造りの技を後世に引き継いだり、新しいアイデアにつなげることもできる」と尾畑さん。そしてこの数値を伝えているのが、コミュニケーションロボットだ。「無機質な数値も、声として届くことで、温もりや親しみが感じられるのがいい」。今後はコミュニケーションロボットに酒の知識をインプットし、質問などにも答えるガイド役に育てていく予定だという。

また「佐渡から島国ニッポンの未来を考える」をテーマに年に1回、6月に行われている特別授業は、今年、初めてオンラインで世界に発信される。現在の佐渡の農業や島の循環を動画で伝えるほか、佐渡の高校生とアメリカの学生をつなぎ、対話を通して一つの日本像を提示していく予定だという。「新型ウイルス禍ということでオンラインに踏み切りましたが、オンラインなら離島にいても通信という橋が架かる。佐渡にいながらにして直接、世界とつながれるということを、次世代の子どもたちに伝えたい」。酒造りという伝統技術も、最新技術とコラボレーションすることで、可能性が多方面に広がっている。

オリンピック聖火リレーとは

ギリシャ・オリンピアの太陽光で採火された炎を、ギリシャ国内と開催国内で、開会式までリレーによってつなげるものです。オリンピックの象徴である聖火を掲げることで、平和・団結・友愛といったオリンピックの理想を体現し、開催国全体にオリンピックを広め、関心と期待を呼び起こす役目を持っています。

開会式当日、最終ランナーによりメインスタジアムの聖火台に点火され、大会終了まで灯し続けられます。

写真提供：東京2020／共同通信社

NTT東日本は、新潟県の東京2020オリンピック聖火リレーを応援しています。

K21-00560【2106-2106】